

ゼロ年代の 50冊 2000-2009

1968年と1974年。戦後の二つの西暦年を表題に掲げたこの2冊は、同じ62年生まれの気鋭の学者2人が、まったく対照的な方法でそれぞれの年の歴史性にアプローチした著作である。

小熊英二さんの『1968』は上下、各千頁を超える大著だ。全国でベビーブーム世代の若者たちが起こした「あの時代の反乱」とはなんだったか、その全体像を描こうという壮大な企図による。

起点を65年の慶大学費値上げ反対闘争に置き、72年の連合赤軍事件を一つの終わりとして、時代背景や60年安保後のセクトの状況から主要な闘争、ベ平連、リブなども含め膨大な資料を読み込み、再現していく。その空気を直接知らない世代である著者は、「神話」や「ドラマ」の衣装をはぐことにも容赦がない。大半の若者にとって、政治や革命よりも自身のアイデンティティー危機など「現代的不幸」が動機にあり、戦後日本が大量消費社会に変化していく先触れになったなどという総括に、長い道のりを経て到達する。

兵庫県の横山閲治郎さん(59)は、「時代を整理した書物として評価」しつつ、「現代的不幸」という表現が「時代を覆う言葉として熟成度が足りない」と指摘。一方、かつて学生運動に「のめり込んだ」という岡山県の野村未知子

『1968』



小熊英二著。新臨社、2009年刊、上下各7140円。『〈民主〉と〈愛国〉』では大佛次郎論壇賞受賞。

さん(61)は、「当時こういう見方ができていたら、もっと主体的にかかれたかもしれない」と体験を思い起こし、小熊さんの前著『〈民主〉と〈愛国〉』以来の読者という神奈川県の開上光代さん(63)も、「1カ月余り、家人や家事に邪魔されない早朝を読書にあて、期待通りの充実、感動、幸福を味わった」という。

50冊アンケートでは、ジャーナリストの佐々木俊尚さんが「70年代からゼロ年代にいたる日本の言論——論壇、マスメディア、市民運動の立脚点がどこにあったのかを、本書は冷酷なまでに暴露している。現代日本社会の精神風景をみごとに解き明かした大作」と高く評価。学習院大教授の井上寿一さんも、「戦後最大の社会変動の『物語』を描き切った名作。歴史叙述に必要なあらゆる要素を満載している。歴史社会学が到達した大きな道標となるに違いない」と賛辞を惜しまない。

【1968】戦後最大の社会変動の「物語」描き切る